11月に入りました。季節もだいぶ進んでいることを実感しますね。10月に入って夏の暑さが落ち着いてきた頃から、住宅街の路地などを通ると、どこからともなくキンモクセイの香りが漂ってきたりして、暑くも寒くもないこの心地いいわずかな期間を心ゆくまで味わいたいと思っている次第です。

キンモクセイの香りを嗅ぐと、思い出す人がいるのです。それは30年ほど前に亡くなった私の祖父です。祖父は10月に亡くなりました。そして葬儀は祖父の自宅で執り行われました。その祖父の自宅にキンモクセイが植えられていたのです。しかしその当時、庭木の種類などに全く関心のなかった私は、キンモクセイが植えられていることなど気付いていませんでした。

葬儀に出ているときにもキンモクセイが香っていることなど全く意識していませんでした。亡くなった祖父との思い出を回想したり、残された祖母のこれからのことを心配したりと、きっと頭の中はいろんな感情で一杯になり、周囲の状況に意識が回らなかったのかもしれません。

ところが翌年、祖父の自宅ではないところでキンモクセイの香りをふと嗅いだときに、すぐに思い出したのが祖父のことだったのです。もしやと思い、後日、祖父の自宅に行ってみると、何とも言えない甘い香りを漂わせるキンモクセイの花が咲き誇っていたのです。この時初めて私は、祖父の自宅にキンモクセイが植えられていることを認識したのです。

なぜ今、こんな話をしているのか。それは、人間の五感と記憶には強烈な繋がりがあるということを皆さんに意識してほしいからです。視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚の五感を通して感じたことや覚えたことは、脳に深く刻み込まれる。五感が刺激された状態の方が、人間の脳は冴えてクリアな思考ができる。このことを皆さんには覚えておいてほしいのです。

このことの裏付けになるのではと私が個人的に思っていることをいくつか紹介します。1番目は物理学者のアインシュタインです。これはどこの大学かは忘れましたが、何年か前の大学入試問題の英語の長文読解で出されていた内容です。

アインシュタインは一時期、夏は別荘地のロングアイランドという場所で過ごしていたそうです。そこで散歩をしたり、趣味のヨットに乗って余暇を過ごしていたと言われていますが、散歩中によく迷子になったり、ヨットが転覆したり座礁したりして、地域住民の手をしょっちゅう借りていたというのです。地域住民からはちょっ

と風変わりなおじさんが何かやっていると言う感じで見られていたようです。
　でもこれは、アインシュタインがただの方向音痴でヨットの腕が全然ないというだけの話なのだろうかと私は思うのです。散歩をしたりヨットに乗ったりして自然を全身に感じながら、つまり五感をフルに刺激しながら、頭のなかでは物理理論とかをあれこれ考えていたのではないか。だから気付いたら知らないところを歩いていたり、ヨットで岩に乗り上げてしまったりしていたのではないか。私にはそんなふうにも思えるのです。
　実際、アインシュタインは1939年の夏をロングアイランドで過ごした後、原爆開発の契機となるルーズベルト大統領への手紙を執筆したと言われているのです。

　2番目は作曲家の吉俣良さんです。大河ドラマ「篤姫」のテーマ曲を作曲されたことでも有名な方ですね。出身高校は鹿児島中央高校です。私は数年前、鹿児島中央高校の60周年記念式典に出席したのですが、その時の講演会の講師が吉俣さんだったのです。講演後の生徒の質問に、「吉俣先輩は、メロディーは突然、天から降ってくるみたいなことをおっしゃっていますが、実際どんな感じなんですか？」というものがありました。その質問に対して吉俣さんは、「斜め４５度上から降りてくるんだよ。」と冗談を交えながら、「作曲も５分考えて思いつかなかったらそこでやめる。そこで時間を延ばしてもいい曲はできない。だからそんな時には散歩したり他のことをする。そんな時にいいメロディーが突然浮かんだりする。」とおっしゃっていました。なるほど、体を動かして五感を呼び起こすことで、いい発想が刺激されるのかなと思った次第です。

　そんな私も、似たような経験をしたことがあります。自分の子どもが生まれる前、妻と二人で名付けに関する本を何冊も読んでいました。男の子だったらどんな名前がいいか、女の子だったらどんな名前がいいか、あれこれ考えはするものの、「これだ！」という決定打はまだ出ていない頃でした。
　そんな春先のある日の夕方、女の子の名前が私の頭にすっと浮かんだのです。しかも漢字の文字までです。そのとき浮かんだ名前が今、娘の名前になっているのですが、その時私は妻と一緒に犬の散歩をしていたのです。春の心地よい風を全身に浴びながら、川沿いの土手をゆっくりと歩いていた。これも五感が喜ぶ状況だったのかもしれない。何冊も本を読んで、ああでもないこうでもないと思考がまとまっていないところで、五感がそっと手を差し伸べてくれた。私はそう思っているのです。

ところで皆さんは、五感を使って、五感を意識して勉強していますか。日本の教育現場にもＩＣＴが普及し、タブレット等を用いた学習がごく普通に行われるようになりました。これは、これまで学習者に経験できなかった恩恵をもたらしています。情報を即座に検索したり、学習者同士で共有したり、交換したり、また、先生へレポートを提出したりと、紙を用いずその場で、しかも瞬時に実行できる。先生方も、板書すべき内容はあらかじめスライドにして投影すれば、板書の時間を大幅にカットできる。そういう点はＩＣＴは長けています。しかし、私が心配しているのは、このような情報ツールを使ってはいても、肝心の皆さんの脳がどれくらい活動しているかということなのです。五感が刺激され脳が活発に動いているのか、このことが疑問なのです。

最近の高校生は、これは川内高校の生徒の皆さんに限らないのですが、授業の様子などを見ていると、モニターやスクリーンに映し出されたスライドをただ眺めているだけで、メモを取らない。手を動かさない。講演会で講師の話を聞く際も同様で、パワーポイントのスライドをただ眺めているだけです。手を使って文字にして書き留めることは、五感を刺激し脳への定着を促すのにそれをやらない。やはりこれは問題なのではないかと私は思うのです。

私はここでＩＣＴを用いた教育を否定しようとしているのではありません。ＩＣＴが長けている部分は大いに活用すべきだと思っています。ただ、それだけで、ＩＣＴ利用だけで学習が完結すると思ってほしくないということなのです。

例えば、川内駅から鹿児島中央駅までＪＲで行くことになったとする。だけど、時刻表は持っていない。今の時間だったら、何時何分の列車があるかという情報が欲しい。そんな時はスマホがあれば一瞬で検索できますね。そして、列車に乗ってしまえば、その時刻表の情報は忘れてしまってもいい訳です。

でも、皆さんが学習している内容は、この時刻表の情報のようにその時だけ、一瞬だけ知っていればいいようなものでしょうか。違いますよね。しっかりと自分の脳内に定着させ、それを用いて別の事柄にも応用していかなければならないような内容のはずです。そうするためにはやはり、紙と鉛筆を使って、覚えるべき情報を自分の言葉で文字に起こすとか、きちんと計算過程を書きながら計算するとか、国語や英語の文章を理解した上で音読するとか、というような五感を刺激するいわゆるアナログな作業が必要になってくるわけです。

サッカー日本代表の森保監督や、アメリカ大リーグ、ドジャースの山本投手が試合中に要所要所でメモを取っているのを見たことがありますか。あれはきっと、様々な問題点や課題、あるいはうまくいった点や自分の強みなど、これから忘れてはならないことをその都度、自分の言葉で小さなノートに書き留めているのだと思います。その方が自分の頭でしっかりと納得できる。そう思っているのではないかと私は推測しています。

五感を大切にして勉強してほしい。今日はそういう話でした。タブレットだけが電力を消費して熱を帯びていても、皆さんの成績は一ミリも上がりません。五感を刺激するアナログ作業を通して、肝心の皆さんの脳が活発に活動して初めて、皆さんの頭は良くなるのです。私が言う「脳に汗をかけ」とはまさにそういう意味なのです。皆さんがどれくらいやり遂げられるか、健闘を祈っています。

以上で今日の話を終わります。